

「協同社会」のデザイン — 協同総合研究所30周年誌 ② —

前月号に続いて協同総合研究所30周年を特集テーマとしています。本号の特徴は特に未来をつくる主体となる20代～30代の若い視点から、協同総研のあり方、協同を軸とした社会のあり方を語っている点です。

30代座談会では、研究と実践の関係性が議論の中心になりました。研究が新たな視点を実践に持ちこむとともに、実践から研究を組み立てるなど、参加者から研究と実践をつなげる意味が語られていたと思います。「研究をする意味」「研究の方法論」「団体・個人をつなげる」「人材育成に関わる課題」「地域実践の調査・研究の在り方」のテーマも出て、今後の協同総研の研究活動を推進するヒントが出されたように思います。このような研究と実践の対話を継続的に行なうことが、協同社会をデザインするときの課題・テーマを出すことにつながると考えています。

総会記念フォーラムでは20代の視点から「社会の矛盾と未来のデザイン」をテーマに報告されました。社会の矛盾・関心から行動している4人が登壇し、各報告者の生い立ちから、今後のそれぞれの幹(生き方)を話されました。気候危機への行動、フリースクールづくり、身近な大学コミュニティでの大学生協の活動などを通じ、社会のあり方を鋭く問うとともに報告者の想いがほとぼしる場となりました。そして「理想を語ることの大切さ」を話されたとき、参加していた30代以上の方々も20代の若者の意見を聞き、勇気づけられた方も多かったように思います。一人ひとりがありたい社会を語りながら、行動していくことそのものが協同社会を描く一つの原動力になると感じました。

このように20代～30代の若い人たちが語ったことを本号の基調としながらも、未来を描くときに過去から学ぶことも大切だと考えています。そこで「労働者協同組合における協同労働の起源」や「労働者協同組合・協同労働に関わる著作・論文紹介」も掲載しました。1992年から労働者協同組合で語られはじめた「協同労働」の起源とその性格について深める内容になっているとともに、より学びを深めるための資料一覧を掲載しています。

前月号とセットで協同総研30周年を振り返りその未来を描きながら、協同の社会をどのようにデザインするのかを会員の皆さんと考え合える一助になればと考えています。

相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)